

曉莊実験学校における陶行知生活教育論 の形成とその実践の検討

学校教育学研究室 世 良 正 浩

A Study of the Formation of Tao Xing-Zhi's Theory of Life Education and the Practice of Xiao-Zhuang Experimental School

Masahiro SERA

Tao Xing-Zhi (1891-1946) was one of those who studied in the United States and returned home to dominate the Chinese academic circles of the pre-revolutionary days, but he was later known as an activist of the People's Education Movement, which was strongly colored by John Dewey's educational theory.

In this paper, I will deal with the following problems: (1) Tao's educational thoughts, and (2) the theory and practice behind Xiao-Zhuang experimental school.

Tao's educational thoughts were not formulated into a complete theoretical system, but were a guiding-spirit for his educational practice. I will analyze his theory of jiao-xue-zuo he-yi (教学做合一) — a union of teaching, learning, and doing. This theory reflects Tao's strong criticism of China's traditional notion of "instruction" and his desire to critically adapt the project method.

Xiao-Zhuang, Tao's most famous educational creation, was established in the suburbs of Nan-Jing in 1927 and was closed in 1930. Xiao-Zhuang was multi-educational institution with three major aspects: teacher-training, elementary education and social education (or social reform)

はじめに

現代中国における陶行知評価と研究について簡単に分析して、陶研究の現状と問題点、及びそのなかでの小論の課題を明らかにすることから始めたい。

現代中国教育界の長老であり、陶行知の生前の友人である陳鶴琴は、1979年3月北京で開催された全国教育科学発展計画会議に書簡を送り、陶行知の教育実践と思想を全面的かつ系統的に整理し科学的に総括するように建議しているが、そのなかで次のように述べている。

“曉莊を創設してからの彼（陶行知——引用者）の人民に対する崇高な精神と創造力は、わたしを鼓舞しつづけた。彼が反動派の迫害を受けて死亡したことしで、わたしの政治認識は高まった。彼の人民に対する貴重な貢献をわれわれは継承し発揚しなければならないと、わたしは考えている”¹⁾。

陳鶴琴のこのことばには、現代中国で陶行知を評価する人々の心情が的確に表現されている。つまり、中国で

は陶を「人民教育家」と称することがしばしばあるように、彼にはやくから内在し、次第に顕著かつ堅固にされていった人民的な教育者としての態度をもって、陶は評価されているのである。これを換言するならば陶行知は、彼の教育実践に貫かれた一定の立場によって、現代中国に強い影響力を持つ教育家のひとりになったと言えよう。事実、陶には次のようなユニークな経歴があった。すなわち、彼は旧中国学術界を支配したアメリカ帰国留学生の一員であり、1917年に帰国すると直ちに25歳で南京高等師範学校教授に就任した。しかし彼は自己のそのような地位に対して批判的であり、1922年には教授の職を辞任し、以後は様々の形態の教育普及運動を組織し指導し続けた。そして1946年に国民党右派勢力による暗殺同様の最期を遂げたのであった。

陶の没した年から1951年にかけては、「人民教育家」という名声を彼が最も博していた時期であったが、彼についての研究論文が数多く発表されたのは、1951年5月に毛沢東が先鞭をつけて開始された武訓批判運動以後のことであった。前述した陶行知の人民的な教育者として

の態度に共感することから、陶研究が進められるのであれば、その態度が具体的に体现されている彼の教育実践そのものの整理と分析とが第一の研究課題にされたと思われるのであるが、武訓批判を契機として、「人民教育家」という規定自体が疑問視されていた時期であったために、当時の陶研究は、彼の生活教育論とこれに大きな影響を及ぼしたデューイ教育理論との比較検討を主要なテーマとして展開された。もちろん、陶の教育実践が基点として立脚していた生活教育論は、陶研究で当然取り扱われるべき重要なテーマである。それ故、陶とデューイとの対比は、陶の生前から検討されていた問題であり、また陶の死後1年目に、生前彼に師事した戴伯韜が、陶の伝記的考察として現在でも最高水準にある「回憶陶行知先生」を發表したが、戴は同書でこの問題について次のような見解を表明していた。

“陶氏の学説は、おおかたデューイに由来するものであるが、しかし青は藍より出でて藍より青としと言うように、彼はデューイのよい側面を吸収してそれを発展させたのである”²⁾

武訓批判以後の研究でも、この問題について成果が多少見うけられる。しかし当時の陶生活教育論の考察は、全体的に生硬かつ不十分なものになってしまったと結論的に言うことができる。その理由として、第1に、当時はデューイの教育理論を否定的に帝国主義の理論とみなすという共通認識があったこと、第2に、生活教育論についての研究は哲学的な観点から活発に行なわれたのであるが、それに反して彼の教育実践についての研究は新たな進展がほとんどみられなかったことの2点を指摘することができよう。結局、1950年代の陶研究が最も盛んであった時期には、彼の生活教育論について批判的さらには否定的な見解が有力になってしまったが、しかしなお、陶行知はデューイの単なる中国版としかみなされなかったのではなかった。むしろ、デューイについては帝国主義の教育理論という前提にはたつたものの、前掲した戴見解のように陶行知は、デューイ理論の発展的契機を内在させていたという見解も依然として一部には存在していたのである³⁾。

筆者は、基本的に、このような発展説の立場から陶行知研究を進めようとしているのであるが、以上述べたことからこの場合に必要ながらが明らかにされたと思う。それを再度確認すると、教育実践の検討を重視すること、生活教育論の分析に当っては、デューイ教育理論に批判的に接することは当然であるが、かつてのようなデューイ教育理論は反動的という前提には疑問を持つことである。特に、後者は1950年代の中国における陶

研究を今日活用する場合留意しなければならないことがらである⁴⁾。

以下小論は、上述したことがらに注意しつつ、暁荘実験学校時代とその前後における陶行知生活教育論の性格とその内容の形成、及び暁荘の実態についての初歩的な検討を試みる。

I 陶行知生活教育論の性格と展開

A 陶行知の教育理論に対する態度

陶行知は、彼自身も認めているように教育普及運動実践家であった⁵⁾。彼は中国教育の現実に即応して、例えば平民教育運動から農村教育運動へと言うように、自己の運動の形態を次々と変容させていったのであるが、その活動は、かつて教育を受けたことのなかった人々への教育普及を目的としていたのである。ところで彼は、後に検討するように自己の活動の理論的基点をデューイ教育理論に求めていた。しかし、彼はその生涯を通じてデューイ教育理論を系統的に研究した成果を叙述した論文を發表したこともなかったし、また生活教育論自体を取り上げて体系的に叙述したこともなかったと言って過言ではない。したがって陶は、デューイ教育理論の精神を教育普及運動に適応させることによって、その運動をより現実的かつより豊かなものにさせていくことを一貫して課題としていたと言った方がより正確であろう。

デューイは1919年3月から1921年7月まで中国に滞在し、このため当時の中国は熱狂的なデューイ・ブームに巻き込まれていたが、そのような状況のなかで陶は、デューイ教育理論に対して慎重な態度で接することを主張していた。彼は、デューイ訪中の直前、デューイのホスト役として胡適と並び称された蔣夢麟が主宰した教育ジャーナリズム「時報教育週刊」に「デューイ先生の教育学説を紹介する」という文章を寄稿している。そのなかで、デューイの主要著作16冊の書名と、彼の論文が掲載されている雑誌名を紹介し、続いて次のように述べている。

“上に掲げた書籍や雑誌は、デューイ先生の教育学説を研究する人は、すべてを備えて参考にしなければならない。しかし教育界の普通の人間は、最も重要な数冊を読めば、彼の理論の概容を知ることができる。彼の著作のなかで教育と最も関係のあるものは、『民主主義と教育』・『明日の学校』・『思考の方法』・『実験論理学』の4冊である。この4冊を教育界の人々は全員購入すべきである。わが教育界の同志も、デューイ先生の学説を研究したいと思うであろう。それならばまずこの4冊を読まねばならない”⁶⁾

このように陶は、ともすれば皮相なものになりがちだったデューイ・ブームのなかで、デューイの重要な著作を熟読し研究することを教育界の人々に勧めていた。さらに陶はこの文章の最後で再びデューイの言論を紹介すると述べているのだが、そのような文献は現存していない。しかし『民主主義と教育』の中国語翻訳には大きな貢献をしている。すなわち同書の中国語完訳本は、1928年3月になって鄒韜奮の翻訳で初めて出版されたが、陶行知は鄒の訳稿の校閲を担当し、訳本の奥付には「校訂者陶知行」（まま一引用者）の記載を見ることができる。

デューイの訪中から1924年にかけては、中国教育のアメリカ化が急速に進化した時期であり、デューイを始めとするアメリカの様々な教育思潮が活発に翻訳紹介された時期であった。陶は、中華教育改進社の主任幹事として新教育の定着と発展に尽力したのであるが、彼は単なる模倣としてのアメリカ教育の導入には批判的であり、主体的な受容を態度としていた。こうした態度は、彼の著作にも当然反映されており、また新教育が停滞し始めてからはさらに厳格なものとなった。彼は、1928年に自編の著作集『中国教育改造』を出版したが、同書の「自序」で次のように述べている。

“以前の原稿を選ぶに当って、わたしはひとつの決心をした。それは外国教育制度のために人力車を引く文字はすべて削除して残さない。残されたところはすべてわたしの体験にもとづくものにするということである。したがってわたしの書いたものは、わたしの信ずるところであり、またわたしの行なっているところである”⁷⁾

ここで陶は自らを人力車夫にたとえているので、原文を直訳しただけではわかりにくい部分もあるが、その主旨は明解であり敷えんする必要もないだろう。したがって前にも述べたように陶は、デューイ教育理論についても、さらに自己の生活教育論についてもそれだけを取り上げて論じたことはなかったのである。このような状況ではあるが、陶が自らの行動や確信を文章で表現したときには、まれではあるが、デューイの名前をあげて議論が展開されたこともあった。さらにこれらの文章には、やはり彼独自のことばで生活教育論が叙述されている部分も不可避免的に含まれている。

結局、陶行知自らは、自己を教育理論家ではなく実践家と規定していたのであるが、彼の教育普及運動が成果をあげるためには、その運動を指導する精神として陶自らの生活教育論が形成されることが必要だったのである。しかし陶が1946年、55歳で頓死したために、ついに陶行知生活教育論の体系が構築されることはなかった。

しかし近代中国教育史上の重鎮である陶行知による生活教育論の到達点を彼自身のことばに即して分析しておくことは、研究の第一段階にすぎないのではあるが、どうしても不可欠な研究課題であると、筆者は考えている。

B 「教学做合一」論

陶行知生活教育論は、内容的には教育観・教育方法論・認識論という3つの側面から構成されている。まず、これらの観点について簡単に鳥観して問題点を整理しておこう。

教育観として、陶は教育をとらえる原理として「生活」という概念を用いていた。「生活」は初め即事のかつ児童中心主義的にとらえられていたが、曉荘実験学校時代にこのとらえ方は批判的に再検討されることになった。

陶行知の教育方法論としては「教学做合一」論が有名であるが、これは曉荘の教育方法として提案された概念である。結論的に言えば、「教学做合一」は、教化思想の克服による主体的な学習の確立を目的とする教育方法の思想であった⁸⁾。

認識論については、陶行知の行知という名前自体が王守仁の「知行合一」説に由来するものであり、さらにアメリカ留学以降は、「なすことによって学ぶ」というアメリカ流の認識論が加味されることになった。したがって中国の伝統的な知識観に対する批判的な見解、また知識と行為との関係に対する考察は、彼の論文の随所に見うけられるものである。これらの認識論的考察は、「教学做合一」論の理論的根拠となっている。

以上の観点についての考察は、陶の生涯を通して行なわれたのであるが、曉荘実験学校前後の時期に関係諸論文が集中的に発表されていることも事実である。曉荘時代の理論的考察としては、教育観を表現したスローガンである「教育即生活」の「生活即教育」への転換が、何よりドラスティックである。「教育即生活」は、当時の中国ではデューイの教育観を表現した標語としてとらえられており、したがってこの転換をもって陶がデューイ批判の第一歩を踏み出したとする見解もあるが、しかしこの転換の意味するところは前述したように、教育をとらえる原理としての「生活」概念の深化であり、その意味では、あくまでもデューイに対する内在的批判である。しかし陶自身は、「教育即生活」から「生活即教育」へのスローガンの転換について、実はそれほど明確な説明を与えていない。むしろ曉荘時代に比較的詳細な論理の展開がなされたのは「教学做合一」論に関してであった。したがって以下では、「教学做合一」の思想に

ついて陶のことばに即して分析しておきたい。

この思想には、「教学合一」論という前段階があった。「教学合一」論は、陶行知がアメリカ留学帰国直後に教化中心の中国教育の状況を改革する意図をもって提出した概念であり、“教えることと学ぶことは、実は分離することのできないものであり、まさに合一すべきものなのである”⁹⁾。という主張であった。そして陶は、「教学合一」論の根拠として、第1に、学び方を教えることが教師の責任であること、第2に、教授方法は学習方法にもとづかなければならないこと、第3に、教師自身が学問をしなければ人を教えられないことの3点を指摘していた。「教学合一」の主張は、陶の帰国直後の1917年頃には周囲の強硬な拒絶を受けたものの、やがて1919年の五・四運動の高潮や、中国教育のアメリカ化の動きを象徴する1922年の「壬戌学制」公布を契機として、しだいに広範に受け入れられるところとなっていった。

このような気運のなかで陶はさらに“教える方法は学ぶ方法にもとづくべきであり、学ぶ方法はなす方法にもとづくべきである”¹⁰⁾というように教育方法改革の主張を深化させていった。この観点こそが「教学做合一」論の原型であった。陶自身は、曉荘実験学校プランの理論的側面をもっぱら論じた1926年の「中国師範建設論」において「教学做合一」論を系統的に述べたと述べている¹¹⁾。「中国師範建設論」では、後で検討するように「中心学校」の構想を展開させていることが最大の特徴となっている。陶は、“師範学校の出発点はその設置する中心学校であり、中心学校の出発点は、環境における幼児の生活である”¹²⁾と述べている。そして「教学做合一」は、基本的にこの子どもの生活を組織した「中心学校」における教育方法として提出されているが、内容的には思考の教育方法として議論されている。それ故、如何にすれば思考が引き起されるかが問題にされる。

“生長過程に困難が生じてはじめて思考を引き起こすことができ、進歩が達成できる。人間の頭脳はこのために発達し、文化もまたこのために進化するのである”¹³⁾

陶は思考を誘発し展開させる要素として自然と社会における「助力」と「阻力」という考え方を示している。この2つの力量は、“環境が幼児の生活に対して有する二種類の大きな力量”とも言われる。「助力」と「阻力」について明確な定義がなされているわけではないが、両者の具体的な例が列挙されている。それによると「助力」とは、自然界における光線、空気、食物、飲物は通常人類の成長を助けるものであり、社会における言語、文字真知灼見、及び他人との相互依存もまたわれわ

れの成長を促進するものである。また「阻力」とは、例えば暴風雨、水害、干害、害虫など自然界で人間に危害を及ぼすものであり、社会においては汚職官吏、土地の悪ボスやごろつき、盗賊及び不健全な制度風俗の一切がわれわれの成長の妨げとなるとされている。しかし「助力」については、“過度でなければ、助力に転化し得るものである”とも言われている。ところですべての「助力」と「阻力」とが学校教育の対象とされたのではなかった。

“ある環境における幼児の成長に対する助力と阻力とについて長所と短所とを具体的に分析してはじめて教育の実施が指導できる”¹⁴⁾

実際には「助力」と「阻力」のなかから、価値の低いもの、必要性の低いもの、学校で教える必要のないもの、及び教えるべきでないものを除外した残りで、教材と教育課程とを編成すべきであるとしている。このように選ばれた「助力」と「阻力」とによって子どもが思考を展開することが教育の過程とされているが、それには「生活力」の形成という目的が内在していた。陶は、“われわれは自然と社会における助力と阻力とを用いて幼児に生活力を養成し、彼を健全な個人にして自然の征服と社会の改造にむかわせる”¹⁵⁾と言っている。

曉荘の活動が実際に展開され始めると、陶行知は「教学做合一」論が誤解されているという事態に直面した。誤解とは、陶によれば、“教えることと学ぶこととなすこととは一体であって、3つの別個のことではないこと”を理解していないことから生ずるとされた。

“われわれはなすことによって教えるのであり、なすことによって学ぶのである。なすことによって教えるのが先生であり、なすことによって学ぶのが学習者である”¹⁶⁾。

つまり、「教学做合一」とは、「なすことによって学ぶ」認識論を原則とする教育であるとされ、さらにこのような観点からは、共に活動しているという点をもって、教師も子どもも同じ立場であるという解釈がなされる。したがって、結局のところ“『做』(なすこと一引用者)とは何かを明確にしなければならない。そうしてこそ、はじめて教学做合一を明確にする”¹⁷⁾ことができるということになる。この時、陶は、「做」とは“力を労する”うえに“心を労する”ことであると規定した¹⁸⁾。ここで言う“力を労する”と“心を労する”とは、それぞれ順に肉体労働と精神労働とに対比されるものであるが、“力を労する”うえに“心を労する”とは、陶にとって二元論哲学の克服を意味した。

“力を労するうえに心を労するということが一切の

発明の母であって、ことごとくに力を勞するうえに心を勞すれば、事物の真理をつかみとることができるのである”¹⁹⁾

「教学做合一」論の考察は、曉荘閉鎖後も継続された。1931年には、「做」には、行動、思考、新しい価値の創造という3つの「特性」があるという見解が発表された²⁰⁾。さらにこれとほぼ同じ時期に執筆された陶の教育小説『古廟敲鐘録』には、“行動が親であり、知識が子どもであり、創造が孫である”²¹⁾ という記述が見られる。したがってこの2つの説明から思考と知識とが密接に関連しあっているものとしてとらえられていることがわかる。

さらに、戴伯韜によると、陶行知には「教学做合一」とプロジェクト・メソッドとの異同を明確にしてほしいという要望が寄せられていたという²²⁾。はじめ陶は、両者は類似しているが、プロジェクト・メソッドの場合正しい「做」にはならないとしていた。ついで異同についてある程度明確な見解が示されたのは1932年頃であった。陶行知は、プロジェクト・メソッドをデューイの反省的思考の五段階論をその教育の過程とするものにとらえていたために、彼にとって「教学做合一」との異同の問題を明確にすることは、デューイの五段階論を批判的に再検討することであった。

“わたしは十数年間、デューイ先生の原理（デューイの反省的思考のこと—引用者）を体験してきた。けれども先生の言う過程は単極電気回路のように、電流が流れていないのだ。つまり先生は、思考の母について言及していない。この母とは行動のことである”²³⁾

つまり、デューイの五段階論は、困難を感じる段階から始められているために、その前段階である行動の部分が欠落しているという批判である²⁴⁾。陶は、“道を歩けなくなって、はじめて困難を感じる”と言っている。それ故、陶は、反省的思考に対して反省的行動を提案した。それは、(1)行動が困難を生む (2)困難が疑問を生む (3)疑問が仮説を生む (4)仮説が実験を生む (5)実験が結論を生む (6)結論が再び行動を生む、という六段階によって定式化されていた。この六段階が、すなわち「教学做合一」の教育過程なのであった。

II 曉荘実験学校の展開

A 農村教育運動の理念

曉荘実験学校は、1927年3月15日、南京の和平門から燕子磯に至る途中にある労山のふもとの曉荘と呼ばれた地域に開校された「学園村」（斎藤秋男）であった。開校

当初の、「南京試験郷村師範学校」という正式名称が示しているように、同校はもともと師範学校として構想されたが、実態的には、初等教育及び幼児教育、教員養成、社会教育の3つの実験教育を実施した複合的な教育機関であった。当時の中国は、晏陽初が河北省定県、梁漱溟が河南省輝県でそれぞれ農村実験教育に着手したり、代表的な教育ジャーナリズムの『教育雑誌』が、1929年5月と6月に『実験小学教育専号』を発行したように、様々な教育実験が活発に行なわれていた時期であったが、陶行知の曉荘もそのひとつとして注目を集めていた。さらにそれは単に教育界だけにとどまらなかった。例えば、戴伯韜によると、蒋介石夫妻も参観に訪れ、宋美齡夫人は曉荘を絶賛したという²⁵⁾。一方、周恩来は、毛沢東も中国共産党の初期の指導者として知られる惲代英から陶行知の農村運動に学ぶべきであるという主旨の書簡を当時送られていたと、指摘している。このようにさまざまな方面から注目された実験学校であったが、開校3年目の1930年4月、南京政府に閉鎖を強制され、陶自身にも逮捕令が出され、彼は逃亡生活をよぎなくされ、曉荘の教育機能はことごとく停止してしまっ

た。曉荘の実践は、農村教育運動と呼ばれるが、陶がどのように中国教育の状況を認識し、そのためどのような理念をもってこの実践に取り組むことになったのか、まずこの点を検討しておこう。彼は、当時の農村教育の実情を批判して次のように述べている。

“……それ（農村教育—引用者）は、人々にぜいたくをせん望し、野仕事を軽べつすることを教える。それは人々に消費することは教えるが、生産することは教えない。それは農民の子どもを教えて、本の虫に変えてしまう。それは富んでいるものを教えては、とりわけ貧しいものに変えてしまい、強いものを教えては、とりわけ弱いものに変えてしまう”²⁷⁾

要するに、当時の農村教育は、農民の子弟を農業に従事することを忌避する単に消費するだけの人間に変えてしまうという批判である。彼は、このような状況を打開する活路を農村の実情に適應した「生きた教育」の建設に求め、さらに、農夫の身体と科学的頭脳と社会を改造する精神を具有した「生きた農村教師」に、このような教育を創造する役割を担わせるものとした。陶は、そのような教師の活躍を次のように描写している。

“彼が足跡を印すところでは、1年目には学校の雰囲気が生き生きとなり、2年目には社会が教育を信ずるようになり、3年目には科学的農業に効果があるようになり、4年目には村に自治が成立し、5年目には生きた教育が普及し、10年目には荒れた山が林にな

り、無用の人間が生産に従事するようになる”²⁸⁾

また、そのような教師の在職する農村学校は、農村生活改造のセンターとして位置づけられている。以上は、陶の農村教育改造のプランであるが、しかし一方で、1920年代の中国、特にその農村は教育普及が著しく立ち後れていたため、陶の仕事は実際には、彼の理想とする教育の普及という形態で進められた。

“計算してみると、中国には百万の農村があり、したがって百万の学校が必要である。そのためには少なくとも百万の教師が必要である”²⁹⁾

陶自身も百万農村教師の養成という事業に暁荘という拠点を確保したのだが、この師範学校には、既に検討した「中心学校」というユニークな制度があった。それは、従来の師範学校の付属学校という観念の根本的なとらえ直しを旨とするものであった。

“中心学校は師範学校の頭脳であり、師範学校の付属品ではない。中心学校は師範学校の母親であり、師範学校の息子ではない。中心学校が太陽であり、師範学校が惑星なのである”³⁰⁾

端的に言う、これはいわゆる教育実習を軸として教員養成を進めるという構想であるが、「中心学校」と命名するにあたり、「実習学校」という名称も思い浮べたが、このことには、理論と実践の分離というニュアンスがあると思われるので採用しなかったと、陶は但し書きを付けている。このように暁荘では、師範学校の建設と平行して、「中心学校」の建設が重要な課題とされた。

陶が農村学校を農村生活改造センターに位置づけたことからわかるように、暁荘では社会教育の実験も活発に行なわれた。さらにこれは、生活改造という積極的な役割だけでなく、暁荘の実践を地域の人々に理解し協力してもらうためにも必要であった。しかし陶は、暁荘の構想のなかで、実は、社会教育についてとりたてて述べていないのである。これは、陶が農村教育には社会教育的な側面が必然的に内在していると考えていたために、師範学校と「中心学校」について論じることは、社会教育についても論じることになるとしたからであろう。

このように暁荘プランを築き上げていった過程で、陶が当時先進校と評価されていた農村学校の調査を行っていた事実も指摘しておくべきだろう。暁荘プランは1926年に集中して発表されたが、学校調査の報告は1924年秋から発表され始めている。学校調査の成果が暁荘プランに生かされていることは言うまでもない。

B 暁荘実験学校³¹⁾

暁荘実験学校において、教育養成、初等教育、社会教

育のそれぞれが実際にどのように展開したのか検討しておこう。なお、師範学校自体は、陶行知をはじめとして、教員・学生ともに暁荘に移住してきた人々から構成されたが、小学校及び幼稚園には、地域の子どもがかよったり寄宿したりした。

1 教員養成

師範学校については、既に他校に在学して卒業まで残り1年半となっている学生かそれと同等の人を対象とする「第一院」から開校され、師範教育を暁荘で最初から行なう「第二院」は後から開校するものとされた。入学試験は、実際に1時間農業か土木工事に従事すること、知能測定、常識テスト、国語作文1篇、4分ないし5分のスピーチの5項目について実施され、開校当初は、13人が入学した。

入学試験に農業か土木工事を課したことから推察できるが、開校当初は、指導員と呼ばれた教師と学生の宿舍から図書館、教室などに至るまで師範で独自に使用する建物は、彼らが自ら「ちがや小屋」を造ることでまかない、さらに二百畝の荒地を農地に開墾することも行なった。このようないわば白紙の状態から自分達の生活基盤を築きあげていく方針に対して、当時農村のモデル学校として有名であった無錫開原小学校の潘一塵という校長が、暁荘に6日間滞在し、その最後の晩に、求めに応じて、“あなたがたのここでの生活は、まさに原始時代の生活ではないか。農民の生活とは言えない”³²⁾という感想を述べた。これに対して陶は、“原始時代の生活とは言わないまでも、一部は確かに野人生活である。われわれのここでの生活は、野人生活から出発して極楽世界を探索することである”³³⁾と答えている。それは、陶によれば、農村教育の目的が農民の幸福を旨とするとしても、暁荘師範が最初既成の教育機関で教育を受けてきた人々から組織されたことを考えると、この人々が農民の生活から出発するのは不可能であったので「野人生活」から出発するということであった。「野人生活」というのは、この人々がまず農村生活を実感することによって、それまでに学んだ知識や技術を農村生活に有効なものに改造するという意図で行なわれた措置であったと思われる。

“われわれは、人類が天然の勢力を征服するために身体以外の道具を発明し製造し運用しなければならなかったことを実感した。われわれは野人生活を送ってから、道具が非常に重要であると感じるようになった。生活道具がなければ生活教育を空談することになる”³⁴⁾

ここで陶の言う「生活道具」とは、生活に活用される人類の文化遺産のことである。陶は、当時の中国教育に対して文字と書物とを唯一絶対的なものとみなして教え込んでいるために「学生」を「学死」に変えてしまっていると批判した。このような教育には、「老八股」とよばれる中国の伝統的な教育と、「洋八股」とよばれる外国の教育を教条的に模倣した教育との2つのタイプがあるとした。「老八股」と「洋八股」とを是正するための方略として、陶は、文字と書物とは人生の道具にすぎないことを認めること、及び従来文字と書物とを運用する方法は誤りであったと認めることの2点を提案している³⁵⁾。以上は要するに文字と書物とを「生活道具」のひとつに位置づけることを求める提案である。したがって「野人生活」は、陶にとって「学死」を「学生」に蘇生させるという意味を持つものであった。

曉荘師範では、通常の講義や演習に相当するものとして寅会と呼ばれた朝会が毎朝実施された。寅会には師範学校の関係者が全員参集することになっていて、6時15分に始まり6時30分には終了した。まず、「農夫の歌」、「すきの歌」、「かまの歌」を斉唱し、続いて講演が約3分間行なわれ、その後討論に入った。討論議題は、その理由とともに事前に提案されることになっていて、その範囲は曉荘における生活上の困難とか生活の改善に関することになっていた。陶行知の「教学做合一」「在劳力上劳心」、「生活即教育」など曉荘時代の重要な講演も、この寅会などで行なわれたものと思われる。さらに毎週一回小学教学做討論会なども行なわれた。

師範学生には図書の閲読も義務づけられていた。これには指定図書と自由図書とがあって、指定図書は月ごとにその月の教育目標にあわせて選定された。一方、自由図書は学生の任意にまかされたが、メモをとりながら読むことが義務づけられ、月末にはメモの審査が行なわれた。第一期生の入学直後3箇月の指定図書をあげると、1月目は、『設計組織小学課程論』（鄭宗海・沈子善合訳の Bonser のカリキュラムに関する著作）、『明日の学校』（デューイ著）、『医学常識』の3冊、2月目は、『高中心理学』（陸志韋著：陸はシカゴ大学に学んだ心理学者）、『鄉村教育經驗談』（張宗麟著：張は曉荘指導員の一人）の2冊、3月目は、『はえ防除要覧』、『南京虫と蚊』、『実用農業教授書』、『中等農学概論』、『三民主義』（孫文著）、『曾吳治兵録』の6冊であった。

寅会、図書閲読のような基礎的な学習も行なわれていたのであるが、曉荘での教師養成の特徴は、実習に重きを置くことであった。「中心学校」での教育実習のほかにも、「中心学校」の学校管理、師範学校の学校管理、

農作業とかそうじなどを行なう「自然環境征服」、社会教育についてもそれぞれ実習が課せられた。さらに調理についても実習があったが、これは農村に単身で赴任する教師は、料理ができなければとても農村に定住できないという陶の主張によるものであった。さらに「中心学校」での教育実践を支援するために師範学校では、教材の研究と制作が、児童文学、生物、農芸、理科化学、社会科、算数、形象芸術、医薬衛生、体育遊戯の11グループに分かれて行なわれた。このため「中心学校」を前方、師範学校を後方と称することもあった。

2 初等教育

陶行知曉荘プランの特色は「中心学校」の理念であったが、曉荘は創立から閉鎖までの3年間に、曉荘小学、吉祥庵小学、万寿庵小学、三元庵小学、和平門小学、黒墨營小学の6校を新設し、当時農村教育のモデル校として有名であった燕子磯、堯化門の両校と特約中心学校の契約を結んだ。新設校では複式学級が採用されていたが、このような学校は「単級学校」と呼ばれた。陶自身も、“農村教師は最少の経費で最もりっぱな教育を行なわなければならない³⁶⁾と述べているのだが、これらの学校の設立に当っては、経費を可能な限り節約することが重要な課題とされた。これは農村への教育普及を目的とする実験教育にとって必要不可欠な研究課題であったと言えよう。当時、「単級学校」の創立経費は、建築費を除外しても最低160元必要とされていたが、曉荘各小学校の創立経費は、曉荘小学が100円で、他の5校は一律に40元であった。しかも曉荘実験学校の場合は校舎に神社仏閣などを借用するなどの工夫をして建築修理工費を含めての金額であった。このため学校設備品の面でも節約の工夫が可能な限りなされた。例えば、購入しないで自作するとか、農機具のように子どもの家庭から借用できるものは借用するとか、謄写版なしで印刷するようにするとか、オルガンは暫時購入しないとかの工夫である。さらに教師である師範学生の使用する図書は、最低限度確保されたが、児童用図書については子どもの進捗や発達に応じて揃えていくことになっていた。以下で、曉荘小学の沿革と概況を検討しておこう。

曉荘小学は、曉荘実験学校が最初に建設した「中心学校」であった。同校は曉荘全体の開校より10日早い、1927年3月5日に開校した。校舎は、最初捨児岡長生殿という神社仏閣を借用したが、同年6月6日に新校舎が落成した。新校舎は壁が土で屋根がちがやからできていたが、内部には、生活室と呼ばれた教室が3つ、寝室が3つ、事務室、博物館、図書館、衛生室、売店、倉庫、

便所があった。周囲には、農場が3つ、公園、グラウンドがあった。スタッフは、校長には師範学校の指導員が就任し、教師は師範学生が交替で担当し、小学校専属のスタッフのいないことが特徴であった。児童数は、開校当初は32人であったが、1929年秋には70人になっていた。学年学級編成は、「高年級」、「初年級」、「幼稚園」の3つから構成されたが、「高年級」は小学校4,5,6年が、「初年級」は1,2,3年が在籍した。暁荘幼稚園は暁荘小学の付属であった。

カリキュラムでは、当時の小学教育が、カリキュラムと実際生活とが分離し、また教授と訓育とが分裂しているという批判意識にもとづいて「生活法」という構成方法が採用された。「生活法」は、子どものすべての活動を指導することによって、学校教育と実際生活との融合を旨とするものであった。実際には、まず教育目標を定めて、次にそのような生活をおくるための中心的な活動を地域の実態を加味しつつ用意するという方法であった。具体的には以下ようになる。

1. 健康な身体——すなわち健康な生活であり、しばらく伝統的な武術を中心とする。
2. 労働の手腕——すなわち労働生活であり、農業と園芸を中心とする。
3. 科学的な頭脳——すなわち科学的な生活であり、生物を中心とする。
4. 芸術的な興味——すなわち芸術生活であり、しばらく音楽を中心とする。
5. 社会改造の精神——すなわち集団生活であり、集団自治を中心とする。

以上の5項目のほかに、いわゆる3R'sの教育に相当するものとして、「用数」と呼ばれた数字を用いる時間と、「用書報」と呼ばれた新聞や書籍を用いる時間とが午前中にそれぞれ順に20分と50分ずつ用意された。なお、「用数」では暗算と珠算とに重点が置かれた。

暁荘小学の何よりの特徴は、児童の自治組織が完備していたことであった³⁷⁾。この組織は、イギリスの議会制度に似ていたといわれるが、自治組織をひとつの村(または荘)にみたてて、荘佐会議の下に行政院と裁判所が置かれ、さらに村民全体大会があった。村民全体大会は、毎週日曜日に開催され、各機関の活動報告と村民による改革計画の建議が行なわれた。荘佐会議は、自治の指導機関であり、村の活動計画と大会への決議案の審査を行なった。裁判所には、検察部と裁判部があって、検察部は規則違反の証拠を集め、裁判部は村の規則にもとづいて裁判を行なった。行政院には、およそ25の機関があって、それぞれ代表が選ばれて委員会を組織し、事務

を主宰することになっていた。機関名とその活動の概略は次のようになっていた。

美術研究所——村民の美を愛する観念と自然を描写する能力を陶冶する。

武術班——先生を招いて、毎朝武術の練習をする。

音楽会——毎週少なくとも2回音楽を鑑賞し、音楽の練習をする。

小劇社——演劇の同志を集めて先生を招いて、脚本の物色と演劇の練習をする。

日報社——編集員を2人置いて村民の原稿を集め、毎日『暁荘小日報』を発行する。

小商店——村民から募集して文具などを販売する

公安局——正副局長と巡察員数人を置いて、村の秩序を維持し参観の来客を案内する。

衛生局——正副局長と整潔隊5隊を置き、衛生器具薬品を管理し、各隊の整理清掃の成績を調査する

農場——正副場長を置き、農機具を管理し農作業を督促する。

公園——正副園長を置き、庭園の配置と草花の栽培を行なう。

体育場——正副場長と球技チーム幹事数人を置き、体育用具を管理し球技や陸上競技などを提唱する。

消防会——正副会長を置き、消火や避難の練習をする。

博物館——村民が採集した動植物を集めて、陳列や飼育栽培する。機会があれば生物展覧会を開催する。

図書館——正副館長を置き、図書を整理し先生に読書の指導をしてもらう。

弁論会——半月ごと晩に行なう。審判を招いてテーマを定めて、中山と松坡の2チームに分かれて弁論を行なう。

孫文記念週——幹事を1人置き、司会を決め開催中は記録を行なう。

社会奉仕先鋒団——中山と松坡の2隊に分かれて社会奉仕活動を行なう。村の球技、弁論、運動、採集、水泳などを常に行なう。

寄宿生生活団——5班に分かれて食事、洗たく、着替えなどを処理する。各班に班長を置いて班員の行動、衛生、求知などを管理する。

このほかに週会、朝会、午会、明月会という集会が持たれたが、これらはほとんど娯楽集会であった。

3 社会教育

暁荘実験学校における社会教育は、積極的には、社会改造の活動として展開されたが、農村病院、中心茶園、民

衆学校、消防隊、中心大工店などの事業が行なわれた。これらは実験学校が地域社会に融合するために必要不可欠な活動であったが、こうした意味で最も即時的な効果を期待できたのが農村病院であった。曉荘農村病院の医師は、ロックフェラー財団の寄付で北京に設立された協和医学院の学生であったが、病人をひとりでも治ゆると、その家族全員から感謝されることになるのだった。

中心茶園は、文字通り、村人と茶を飲みながら語り合う場所のことであるが、曉荘側は『三国志』や『水滸伝』のような大衆小説を郎読したり、衛生や公民または時事問題などについての講話をしたりした。

民衆学校では、主に成人識字教育が実施されたが、授業では曉荘で編集した『三民主義千字課』などの識字教本が使用された。陶行知は、かつて1923年頃、晏陽初、朱経農等と北京などの都市で成人識字教育を内容とする平民教育運動に全面的に取り組んだことがあったが、このように農村教育運動においても平民教育運動の内容が部分的にはあるが継承されていたのである。

さらに中心大工店は、地域社会の生産力向上を計るために科学技術の普及を目的とした組織であったが、同様な性格の組織に農芸陳列所があった。これらの機関は、黄炎培が1917年に組織した中華職業教育社の援助を受けて運営された。

実験学校の人々が村民に働きかけることを、当初は“民間に赴く”と言っていたが、このような表現では曉荘を意識的に地域社会から分離させてしまうことになるという反省から、後に“友達に会う”という表現に変更されることになった。さらに、「中心学校」の設置にあっては、神社仏閣を借用するとか、子どもを入学させてもらうとかのように地域や親の理解と協力を得ることが重要な課題とされたが、実験学校と地域社会との結びつきという観点からすれば、この点にも曉荘実験学校の社会教育的な側面が認められる。

曉荘実験学校は、1930年に外部の政治的圧力を受けて閉鎖されたが、「中心学校」のような教育機関までが停止してしまった理由のひとつとしては、地域社会の理解と協力を求めることがなお不十分であったことも指摘しなければならないだろう。このため陶行知は、1930年代の半ばに地域社会とのいっそう密接な結合を旨とした「工学団」という新しいタイプの学校構想を発表し、それを実践に移すことになった³⁹⁾。1930年に曉荘がことごとくその教育機能を停止してしまったのは、単に外部の圧力によるだけでなく、曉荘側の主体的要因もあったと私は考える。

(指導教官 柴田義松教授)

注

- 1) 本刊記者「全国教育科学規劃会議記略」『教育研究』1979第2期 p.95
- 2) 戴伯韜『回憶陶行知先生』引用は東京龍溪書舎復刻版 p.35より
- 3) 潘開沛は次のように述べている。
“陶先生の唱えた「生活即教育」、「社会即学校」、「教学做合一」などの生活教育理論は、デューイ学説の単なる翻案でなく、デューイ学説の半植民地、半封建社会における具体的な運用であり、新たな発展である”
潘開沛「陶行知教育思想中幾個問題的高權」『人民教育』第4巻第2期1951.12 p.18
- 4) 戴伯韜は、1950年代には、陶の生活教育論の来源は反動的なデューイの主観的観念論であり、それは終生変わることはなかったというように見解を半転させ、『回憶陶行知先生』は絶版にされた。しかし彼が1950年代に発表した陶生活教育論をテーマとする論文は、このような前提に立つものの、そこでの分析自体には研究の深化が認められる。
- 5) 陶行知「普及教育運動小史」『生活教育論集』上海生活書店 1937 p.290-291
- 6) 陶行知「介紹杜威先生的教育学說」引用は、『新中国』第1巻第3号 1919.7 271-272より
- 7) 陶行知「自序」『中国教育改造』上海亞東図書館 1928.4 p.1
- 8) 陶行知の教育方法論としては、このほかに「小先生」制等が指摘できるが、筆者は、「小先生」制は理論的には、「教学做合一」論にもとづく具体的な授業様式論であったと考えている。
- 9) 陶行知「教学合一」『中国教育改造』p.21 初出 1919
- 10) 陶行知「教学做合一」『中国教育改造』p.169 初出 1927.11
- 11) 同上論文
- 12) 陶行知「中国師範教育建設論」『中国教育改造』p.119 初出 1927.11
- 13) 同上論文 p.120
- 14) 同上論文 p.120
- 15) 同上論文 p.120
- 16) 陶行知「教学做合一」p.169
- 17) 陶行知「在勞力上勞心」『中国教育改造』p.173 初出 1927.11
- 18) 同上論文
- 19) 同上論文 p.175
- 20) 陶行知「教学做合一之教科書」『中華教育界』第19巻第4期 1931.10
- 21) 陶行知『古廟敲鐘錄』1933初版 引用は、上海新兒童書店 1951.3 新4版 p.49より
- 22) 戴伯韜前掲書 p.80
- 23) 陶行知「思想的母親」『齋夫自由談』引用は、北京師範大学編「陶行知的教育思想」『中国近代現代教育史參考資料選輯』1957 p.84より
- 24) 陶行知は、デューイの反省的思考論を、(1)困難を感覚する (2)困難の所在を定める (3)解決の方法を考える (4)多数の方法から最も有効なひとつを選んでためしてみる (5)実験を繰り返して結論を出す、という五段階に整理していた。
- 25) 戴伯韜前掲書 p.43
- 26) 周恩来「学習毛沢東」これは、1978年に公表された、周の1949年の講演である。
- 27) 陶行知「中国鄉村教育之根本改造」『中国教育改造』p.131 初出 1927
- 28) 陶行知「試驗鄉村師範学校答客問」『中国教育改造』p.136-137 初出 1926 (推定)
- 29) 同上論文 p.186
- 30) 同上論文 p.138

- 31) 本節の曉荘実験学校の考察は、陶行知の著作のほか以下
の文献によった。詳細な文献注は省略する。
陶知行主編 孫銘勳・戴自俺合編 曉荘叢書之一『曉荘批
判』上海児童書局 1934
『曉荘批判』は論文集であるが、このほかに、以下の
『教育雑誌』所収の論文を参照した。
孫伯才『『做学教合一』之理論和實際』下編 第20巻第12
号1928. 12
陸静山「曉荘中心小学之創設及其問題」第21巻第5号
1929. 5
- 32) 陶行知「從野人生活出發」『中国教育改造』 p 151 初出
1927
- 33) 同上論文 p 151
- 34) 同上論文 p 152
- 35) 陶行知「生活工具主義之教育」『中国教育改造』初出 1927
- 36) 陶行知「我們的信條」『中国教育改造』初出 1926
- 37) 曉荘小学で自治組織が完備されたのには次の背景があっ
た。すなわち五四運動を契機として中国の教育界では「学
生自治」に対する関心が高まったが、陶行知も将来の共和国
公民を養成する場としてこの問題を重視していた。彼は、
- 「学生自治問題之研究」(1919)などの論文を発表してい
るが、そこでは、生活指導の具体的な方法として「学生自
治」が論議されている。
- 38) 陶行知は、1932年、かつて曉荘実験学校で幼児教育の実験
に取り組んでいた孫銘勳等の人々が再び幼稚園を始めるこ
とになったので、彼等に激励の手紙を送った。そのなかで
曉荘の幼稚園が機能を停止してしまった原因を次のように
分析している。
“わたしは、燕子磯幼稚園（曉荘実験学校が最初に設立
した幼稚園—引用者）を創立したけれども、守ることは
できなかった。それは、半ば、大局に関するところによ
り、半ば、村の母親や娘達に結局影響がなかったことによ
る”
陶知行主編 孫銘勳・戴自俺著 曉荘叢書之一『曉荘幼
稚教育』上海児童書局 1934 p. 212
- 〔付記〕 なお、陶行知が行知と名乗るようになったのは、周知
のように、1930年代に入ってからであり、それ以前は
知行と称していた。しかし、小論では、引用など特別の
場合を除いて、知行に統一した。